

中学校体育における勤勉性向上を目指した授業実践

学籍番号 209358

氏名 銚立政公

主指導教員 井上功一

1. はじめに

2017年に改訂された学習指導要領では育成すべき資質・能力の三つの柱が整理された。その柱の一つである「学びに向かう力・人間性等」は人の気質や特性を表す非認知スキルと関わりが深く、非認知スキルの育成が求められている。非認知スキルの中でも、特に勤勉性は戸田ら(2014)によって学歴や就業人生などに大きな影響を与えること、また将来的な成功にも結び付くことから、勤勉性を高めることが教育政策の方向として重要であることが指摘されている。

今村(2018)は大学生を対象に「やり抜く力」と運動習慣の関連性について調査したところ、運動習慣群は非運動習慣群と比べ、「やり抜く力」に関する回答について有意に高い値を示したと報告している。また、Duckworthら(2007)は日本語で「やり抜く力」にあたる「GRIT」と勤勉性には強い正の相関があることを示していることを踏まえると、勤勉性を育成することは運動の習慣化につながる。そのため、中学校体育における勤勉性の育成は「生涯にわたって運動に親しむとともに健康の保持増進と体力の向上を目指し。明るく豊かな生活を営む態度を養う」という保健体育科の目標に貢献できると考える。

2. 調査及び授業実践

中学校体育において生徒の勤勉性の向上を図る授業実践を行い、体育授業が生徒の勤勉性に与える影響について検証することを本研究の目的とした。勤勉性の測定には、村瀬ら(2017)が開発した体育勤勉性尺度に関するアンケート用紙を使用して、単元前後における勤勉性を測定し、その変化について検討を行う。対象者はK中学校2年生男子89名である。

「陸上競技 長距離走」の単元づくりを、以下の①～③に着目することにより、体育授業において、勤勉性を育成することができるのではないかと考えた。

①運動強度を基にしたペース走の導入

運動強度を基にした12分間のペース走を取り入れ、一定のペースで走ることを目指す。西山ら(2020)は中学生を対象に、RPE法という主観的な運動強度を基に取り組む長距離走を実践し、多くの生徒が長距離走に対し、好意的な感情を持てるようになったことを明らかにしている。勤勉性は自律的に物事に取り組む特性であるため、運動強度を基にしたペース走を実践することにより、その育成につながるのではないかと考える。

②ペア活動による学びの支援

村瀬ら(2017)は「発言を促す場面や仲間と共感する場面を作るなど、授業内の環境設定によって勤勉性を高めることができる」と述べている。そこで、ペース走に取り組む際、記録シートを用いて、一定のペースで走ることができているかについて○・△の記号により評価し合う

ペア活動を取り入れる。

③共有課題の設定と質的な振り返りの導入

村瀬ら(2021)の実践から、共有課題の設定と質的な振り返りが勤勉性の向上につながることを示されている。そこで、毎時間の授業で共有課題を示し、記録シートを活用した質的な振り返りを取り入れることで、運動の取り組みとそれに対する成果を認識させ、勤勉性の向上を図る。

3. 結果及び考察

1、2、4組の「積極的発言」、「挑戦の機会の発見」には有意な向上が見られ、有意差こそ認められなかったものの「勤勉さ」、「仲間への共感」の因子も向上していたことから、本研究における長距離走の実践は勤勉性の向上に効果的であることが示唆された。1、2、4組は段階的に運動強度を上げながら、単元を通して、一定のペースで走ることを共有課題として学習に取り組んだ。ペア活動では、多くの生徒が声をかけ、ペースを守るために声をかけている姿が見られた。運動強度に余裕がある中で、12分間走を行っているため、運動中に声掛けが絶えず起こったことが「積極的発言」の有意な向上につながったのではないかと考える。また、学習カードの記述には、ペースを一定にして走ることや記録シートの○・△の数や目標ラップタイムに関する記述が単元を通して見られた。ペースを一定に走るという共有課題を達成するために、記録シートを見て振り返ることで、「挑戦の機会の発見」の有意な向上につながったのではないかと考える。一方、雨天の影響により、体育館で20mのコーン間を往復する形で6分間走を行った3、5組は体育勤勉性に関するすべての因子が低下していた切り返し連続で想定以上に体力が奪われ、運動強度が高まり、堀ら(2003)が考案した指導方法の一つである全力法に近い走り方になってしまったことが体育勤勉性の低下が見られた要因であると考えられる。

4. まとめ

計画通りに進めることができた1、2、4組では体育勤勉性の全ての因子が向上する結果となり、長距離走において、体育勤勉性を向上することができる可能性が示唆された。これまで体育勤勉性の向上を目指した実践で扱われる単元は球技など集団種目が中心であった。個人種目においても、教師による支援や環境の設定などにより、体育勤勉性が向上する可能性が示唆された。特に、相手がペースを守れているか評価し合うペア活動を取り入れることにより、多くの生徒が積極的な発言や応援をするようになった姿が見受けられた。そのため、個人種目であっても、仲間との交流を実感できるような工夫が運動に没頭して取り組むことに繋がり、体育勤勉性向上に貢献できるのではないかと考える。

今後の課題として、今回の実践では仲間との交流場面において、ペア活動に留まり、グループ活動を取り入れることがなかった。グループ間同質、グループ内異質にグループ分けを行い、駅伝大会など長距離走が集団種目になるような取り組みができれば、ペア活動よりも仲間との交流が多く生まれ、さらに体育勤勉性を育成することができるのではないかと考える。また、勤勉性の育成のために長期にわたって計画を立て、継続的な取り組みを行う必要がある。雨天により体育館で行うことも想定し、余裕を持った計画を立てなければならない。そのため、学期や年間を通じた実践の中で、勤勉性の変化について検討することを課題としたい。